

審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2861 号	氏名	森 美穂子
審査担当者	主査	伊藤 隆一 (印)	
	副主査	豊増 功次 (印)	
	副主査	神代 龍吉 (印)	
主論文題目 : Comparison of subjective symptoms associated with exposure to low levels of formaldehyde between students enrolled and not enrolled in a gross anatomy course (系統解剖学実習に参加した学生と参加しない学生との低濃度ホルムアルデヒド曝露関連症状の比較)			

審査結果の要旨 (意見)

医学生の必須科目である系統解剖学実習においては、遺体の固定・保存薬として用いられる有害物質ホルムアルデヒド (FA) への曝露が避けられないため、昨今、全国の医学系大学でその低減対策が進められている。久留米大学においては2011年の実習室改修により室内FA濃度が大幅に改善された。しかしながら依然として学生の自覚症状が継続している。本研究では、解剖実習経験のない第1学年学生と解剖実習中の第2学年学生の自覚症状を比較し、ロジスティック回帰分析により、解剖実習室における低濃度FA曝露と自覚症状との関連を調査している。その結果「目がチカチカする」「目の疲れ」「涙が出る」「鼻がムズムズする」「疲れやすい」「身体がだるい」という症状とFA曝露との有意な関連、また、アレルギーのある学生および女子学生においていくつかの自覚症状のリスクが高いことが示されている。ここに報告された結果は学術的に意義深く、今後のより具体的なFA曝露対策のために有用であると考えられることから、学位論文に相応しいと判断する。

論文要旨

医学生は解剖実習の際、有害なホルムアルデヒド (FA) に曝露される。本学では2011年の解剖実習室の大規模改修工事によって実習室内FA濃度は大幅に低下したが、学生の自覚症状は継続している。学生のFA曝露低減対策のために、本研究において、解剖実習中の低濃度のFA曝露は学生のどのような自覚症状と関連しているか調査した。

実習期間前、期間中、終了半年後に、解剖実習を行った2年生125名 (FA曝露群) と解剖実習を行っていない1年生124名 (FA非曝露群) に、最近1ヶ月間の自覚症状、性別、年齢、アレルギーを問う自記式質問紙調査を行った。調査時期による自覚症状の有症者割合の差およびロジスティック回帰分析によって自覚症状とFA曝露の関連を検討した。

FA曝露群において、喉や鼻の症状や不定愁訴の罹患率は実習前に低く、実習中増加し、半年後に減少する傾向があった。性別、年齢、アレルギーの有無で調整後FA曝露と有意に関連した自覚症状は「目がチカチカする」「目の疲れ」「涙が出る」「鼻がムズムズする」「疲れやすい」「身体がだるい」であった。本研究で、解剖実習におけるFA曝露と関連する具体的な自覚症状を特定した。